横須賀市博研報(人文)　Rept. Yokosuka City Mus., No.(70):9-32. Mar. 30, 2026

語りのなかの横須賀　―髙橋清氏の語り―

瀬川渉*

Yokosuka in Narratives
—Narrative by Mr.Takahashi Kiyoshi

SEGAWA Wataru

This paper compiles oral history interviews with Takahashi Kiyoshi, a fisherman from Kamoi, Yokosuka City. He was born in Kamoi, Yokosuka City in 1933 and continued working as a fisherman until his later years. This paper focuses on stories about fishing in Kamoi, while also documenting local festivals and other aspects of the community. In the late 1960s, a folklore survey was conducted in Kamoi, Yokosuka City by the Kanagawa Prefectural Board of Education. The report from that survey compiled interviews with Takahashi Kiyoshi's father and others of his generation. By combining this with the content of this paper, it is possible to gain a clearer understanding of the lives of fishermen in Kamoi, Yokosuka City, over the past 100 years.

小稿は、横須賀市鴨居在住の髙橋清氏（昭和８年生まれ）に地域のことを聞き取り、その内容をまとめたものである。話者が語ったことを出来るだけ忠実に書き残すため、瀬川の解釈をなるべく書き入れず、重複する記述もあるがメモ書きどおりの記載を心掛けた。

横須賀市鴨居は『東京外湾漁撈習俗調査報告書』(神奈川県教育委員会、1969 年）において、民俗調査の報告がなされている地域である。小稿でもその記述を話者への質問の参考とし、特に屋号と方言については、話者に該当箇所を示しながら語ってもらった。その報告書には髙橋清氏の父親も話者として名を連ねている。小稿とあわせることで、およそ 100 年にわたる横須賀市鴨居の漁師の生活を理解する一助になるはずである。

○家のこと、自身のこと

・清さんは昭和８年生まれで、昭和 23 年に漁師になった。祖父は慶応２年生まれ、父の名は文蔵で明治 37 年生まれ。屋号はコワキ。

---

*横須賀市自然・人文博物館 Yokosuka City Museum, Yokosuka, 238-0016 Japan
原稿受付　2025 年１２月 25 日　横須賀市　博物館業績　第 803 号
Key Word : kamoi Yokosuka City, Fishermen, Fishing, Purse seine net, Chartered ship
キーワード：横須賀市鴨居　漁師　釣り　巻き網　仕立船

・清さんの祖父は終戦前日に亡くなった。文蔵さんは72歳で亡くなり、70歳くらいまで漁師として働いた。
・清さん自身は80歳まで働いた。孫が生まれたことをきっかけに、50歳の頃、禁煙したが今でも吸いたくなることがある。それまで1日30本くらい吸っていた。
・清さんには弟が3人いたが、父は自分にだけ漁師を継がせた。
・過去帳には、元禄時代の人が載っているが、高橋家の由来などは分からない
・清さんの曽祖父は文左衛門で、この前、100回忌をしたが、何を生業としていたかはわからない。
・清さんの母は双子で、母がツネ、おばがハナだったが、周りが間違えてよくハナと呼ばれていて、本人も気にしなくなっていた。
・清さんが子どものころは、小学校までが義務教育だった。新制中学も2年までしか行かなかった。清さんの同級生も同様に2年でやめた。

○地域のこと

《畑について》

・清さんの家の畑は、土地を借りていた。場所は臨海団地があるあたりで、ぜんぶ畑だった。家の前の道から緩やかな坂を上って畑に着いた。今の臨海団地とほとんど同じくらいの広さが、脇方の人たちの畑だった。
・畑では、小麦、大麦（清さん家ではないが、多少作っている家もあった）、サツマイモ、ジャガイモ、きゅうり、なす、トマト、ゴボウ、ニンジン、サトイモ、大根、ホウレンソウなど満遍なく作った。畑の作物はどの家でも同じようなものだった。
・時化の時は畑仕事、雨の日は畑にはいかなかった。
・脇方（約80軒）には本業の農家はいなかった。漁師や勤め人が自家用に畑をしていた。
・小麦は各家の石臼で挽いていた。大麦は飯に混ぜて食べていたが、清さんの家では食べなかった。粟を作っていた家もあった。
・正月は粟餅を臼で搗く家もあった。
・餅つきは、2，3家が集まり5，6人で搗いた。チョロケンという細い杵で搗いた。仕上げは大きな杵で搗いた。チョロケンを使うのは最初のほうで、チョロケンで5人が同時に搗くときは、餅を返す人はいない。近所の5人の場合もあれば、親戚の5人のときもある。個人個人、搗くためのもち米を持参した。12月25日くらいに早い家は搗いていた。遅くとも暮れには搗いた。25日を過ぎると、あちこちで餅を搗く音がして賑やかだったが、クニチモチは搗くなと言って29日は餅を搗かなかった。ただし1軒だけは29日に搗いていて、苦なく搗けるとしていた。その29日に餅を搗く家は、他の家よりも畑も多く田んぼも持っていた。学校の先生をや

っていた家だった（東の家だった）。清さんの同級生の家でもあるが、その同級生のおじいさんは海軍工廠に勤めていて、草鞋で通っていたらしい。
・鴨居では、小原台の辺り（団地ができる前は 10 軒ほど）が農家で、家同士の間隔も広かった。田んぼは少なく、畑が多かった。
・鴨居に八百屋は 1 軒か 2 軒あった。
・鴨居では 60 年くらい前まで畑をやっていた。臨海団地や小原台の開発がされ、畑がなくなった。

《お神楽について》
・稲荷のお神楽は町内会主催で 2 月 11 日固定だった。
・稲荷のお神楽は、町内会長や隣組の組長などの役付きの人が行く。
・昔はおこわ（赤飯）を炊いて、見物人（ご近所）に配った。
・正月の初神楽と稲荷の神楽は、現在は一緒にやっている
・2 月 10 日稲荷講でその晩にワカイシュ（=中学卒業後から 35，6 歳まで）が太鼓を叩く。
・脇方は、多いときにワカイシュが 100 人ほどいた。
・夏祭りの時に、港の竜宮様のところでお神楽があった。船を出して、神社の沖を反時計回りに周り太鼓をたたきながら一回りし、さらに沖に出て浦賀の沖まで出ていく。さらに観音崎の沖、三軒家のほうへと進み、戻ってきて、お神楽をする。漁協主催のお神楽で海上安全と大漁を祈願するもの。
・竜宮様のお神楽は夏 1 回だけ。神社のお祭りは 9 月にもあるが、それには神輿は出ない。
・7 月のお祭りは昔は日にちが決まっていた。子どもの頃は、宵宮の日は 1，2 時間登校し帰えしてもらえた。当日は 1 日休みだった。しかし、学校も休ませてくれなくなったからなのか、7 月の最後の土日になった。昔は 7 月 15 日だった。小学校の頃と中学校のころでは、やり方が違ってきた。占領期だったからか、祭りの内容にも制限があったかもしれない。子どもの頃、終戦直後、浦賀の祭りはやくざもんが采配していた。腹にさらしを巻いて入れ墨を見せびらかしていた。鴨居の祭りはそういう人はいなかったが、浦賀や久里浜は多かった。
・初神楽や稲荷の神楽は漁師は関わらない。12 月の終い神楽も関わらない。昔の終い神楽は 11 月 25 日だった。
・お神楽のとき、お湯がかかると風邪をひかないなどは聞かない。（佐島のように）ウェという掛け声もない。
・北方は稲荷講が盛んだったみたいだが、脇方は稲荷講はなかったのではないか。
・稲荷の神楽の時、赤飯とおむすびにして配った。見物人にも配った。竜宮様のお神楽にはそれはなかった。竜宮様のお神楽の後は漁師が酒を飲むくらい。

《夏祭りについて》

・昔は、神輿を担ぐハクチョウ（白丁）が朝から三軒家まで行って、腰越と戻ってきて腰越の浜で船に神輿を乗せて、脇方の浜で船から神輿を下ろして、担いで梅山まで行った。それをアゲバンと呼んだ。サゲバンは、八幡様から三軒家に行って腰越まで行って腰越で神輿を乗せるまでのこと。ハクチョウは各町からワカイシュを出して担わせた。脇方のワカイシュが30人くらいハクチョウになった。鴨居で8町あるから200人近くがハクチョウだったと思う。

・神輿を乗せる船は浦賀から観音崎まで回った。その船とは別に、お囃子を乗せる囃子船もあった。お囃子は各町の順番だった。さらにそれとは別にその町内の新造船が先頭を受け持った。鴨居ではどの町内も杉山造船で新造船を頼んだ。そのころは、漁師もまあまあ景気が良かった。神輿を乗せる船は2艘を並べて神輿を乗せ、囃子船も同様にした。とはいえ、漁師のほとんどが脇方で、北方にも漁師が数人いるくらいだったので、脇方の船が多かった。

・昔は幟を脇方の浜へ揚げた。大勢でないと柱が立たなかった。浜にコンクリート製の柱を固定する土台があった。昔（清さんがワカイシュになる前）は八幡様の浜にも幟を揚げた。八幡様の浜に建てた柱は、船に乗せて運んだ。

・とっぴきぴー踊りは、祭りの最終日の昼にやる。太鼓とか笛が得意な人が参加する。

・祭りの初日は幟を立てた後、午後は神輿や屋台が町内を回った。初日は午前10時頃に八幡様で神輿にオタマシを入れてもらう。2日目=最終日=ホンビ、初日はヨイマツリと呼んだ。

・神社のお祭りとは関係なく、別日に婦人会が主体となって盆踊りを盛んにやっていた時期もあった。

《屋号について》

・ヤマンテとスケタロは家が隣あっている。

・コミナミは赤穂キイチロウさんのところに養子に入った人（モライッコ）。

・昔はモライッコという男子を養子に出す習慣があった。夫が戦死した人が息子をモライッコに出して、自分は他所の家に嫁に入った。戦死した夫の弟と再婚することもあった。跡取りがいる家でもモライッコを受け入れた。跡取りとしてではなく、漁師の手伝いとしてもらう。漁師は人手が必要だった。なのでモライッコは、幼児ではなく漁師の手伝いができる年齢でなければいけなかった。モライッコは男子だけだった。モライッコは大人になると独立した（自分の船を持った）。

・丸茂辰蔵さんは、本家がナンヤという屋号で、タッチャンとみんな呼んでいて屋号はなかった。丸茂辰蔵さんもその子どもも漁師だった。

・マルカの西脇ハルさんが下浦から婿をもらった。魚屋をやっていた。大きな船を持っていて築地まで運んでいたが、時化にあって駄目になったようだ。文蔵さんの代かその一つ前の話で、当時はエンジンがなく帆の時代だったから。婿の代では農家になっていたのではないか。

・ブンサンの斉藤徳蔵さんは、婿に来て漁師をやった。漁師の前は勤め人だったようだ。
・サンコサンも漁師、サンコサンの本家も脇方にあった。
・キチベも漁師。
・フナダイクの杉山喜代松さんは浦賀の川間出身。子どもの頃から船大工をしていて、浦賀は船大工が多いから鴨居に来たのではないかと思う。
・腰越のゲンカさん（小松十次郎さんの息子？）、浦賀ドック定年後に漁師を始めた。
・腰越のヤマンネ（高橋弘さん）も浦賀ドック定年後に漁師を始めた。
・定年後の漁師は、そんなに上手な漁師にはならない。
・東のセイザエム（斉藤トメさんの夫）は、海軍工廠で働いていた。草鞋を履いて通っていた。
・東のヒガシマル（斉藤新造さん）は、網の漁師。夏はタタキという仕掛けでスズキやアジ、メバルを捕っていた。冬（12から3月）はアグリ網の網元で人を使って、コハダ・コノシロを捕っていた。
・東と宮原（みやばら）の境にある、ハマチョウは一時期羽振りが良かったと聞いた。
・北方のシントク、（赤穂平蔵さん、ヘイチャンとも呼ばれていた）は魚屋だった。
・北方のシロエム（シレエムと発音、シレエムさまと呼んでいた）は、百姓だった。文蔵さんと仲が良かった人は下浦から婿に来た。
・北方のハチゴロウは、コハダなどを捕る漁師（石田保さんの親）だった。保さんは漁協の職員。保さんも婿。
・北方のオシタは、アミカケの漁師。夏はイセエビを捕っていた。冬は東のアグリに親方として乗っていた。
・北方のエキチも漁師。文蔵さんの妻、清さんの母の実家。青木啓一さんの母は、東京から嫁に来た。啓一さんはツレッコだった。啓一さんも漁師をやっていた。
・北方のチョウサク、昔は（文蔵さんの前の代）カツギボテ（魚の行商）をやっていたようだ。清さんの世代は勤め人だった。
：北方のトメサン、伝次郎さんは若いときは漁師をしてから、終戦後ベースで働いていた。ベースを定年になってからはヒガシのところで働いていた。
・仲の谷戸は大室漁港がある地区。清さんが子供の頃は大室ではなくナカノヤトと呼んでいた。佐島から移り住んできた人たち。みんな見突き漁師だった。今の代は遊漁船をしている。
・仲の谷戸の豊丸（ゆたかまる）、福本豊次さんは60歳で亡くなったが、文蔵さんの所によく相談に来ていた。アグリの船をもっていた。
・脇方のシミズという家は石渡という苗字で漁師だった（文蔵さんと同じ世代の人が1代かぎりで、息子は漁師じゃなかった）。シミズのおやじの事をナベアニと呼んでいた。清さんの父である文蔵さんもナベアニと呼ばれていて、文蔵さんの弟で分家の国蔵はカマアニと呼ばれていた。身体が弱いと別名で呼ぶと聞いた。文蔵さんが大人になってもナベさんやナベアニと呼ば

れていた。兄弟で身体が弱かったのかもしれない。文蔵さんは次男で、長男は子供の時に亡くなっている。
・脇方のモチヤは、もともと漁師だったが、清さんの代では違った。
・三軒家のイシヤは、昔は漁師だった。
・北方のイチワリモト（イチャリモト）は、チョウサクの隣の家、一番高い所に家がある。
・昔は、漁協の組合長は漁師でなく地元の有力者になってもらった。例えば、小原のカヘイは市議会議員経験者だった。
・コワキの分家はコブネという屋号で、文蔵さんの弟である高橋国蔵さんの家であった。
・脇方にはトウフヤという屋号の家があるが、清さんはその家が豆腐屋をやっているところを見た事がない。

《方言について》
・兄さん=あんちゃん（小さいころは）、長兄=でっかいあんちゃん・イセキ（長男、跡取り）
・父=おとっちゃん、とうちゃん、ちゃん
・母=ちゃーちゃん
・家族の呼び方は家によって違っていた。
・祖父祖母=おじいさん、おばあさん
・あなた=ワレ、オメッチ、おめえ、うぬし、あにい
・え、お=お前（急いでいる時、おいという意味か）
・うまくいかない=げーもねーやと言った。
・大漁祝い=オキアガリ、大勢で宴会することで大網漁師がよく使った。釣り漁師はあまり使わない言葉。
・そうだろう=そうだんべ

《その他》
・鴨居で勤め人といえば、ほとんどが浦賀ドックだった。
・戦争中は、東京や横浜の方は、毎日のように空襲で赤く光っていた。清さんが小６のときに終戦を迎えた。
・戦時中の脇方では、漁師が２人、沖で飛行機に撃たれて死んだ。清さんの父がその場にいた。そこは機雷が多く禁漁区域で、鴨居に海軍の防備隊もいたが、終戦間際にはうるさく言われなくなっていたため漁をしていた。戦後、機雷を爆破処理したときは、衝撃波で魚が死に浮いてくるので、漁師はみんな浮いている魚を捕りに行っていた。
・脇方の清さん家への道にも山に穴があり、海軍が防空壕として掘った。堀った時に出た土はトロッコで運んだ。また、その時に出た土を道に積み上げてもいたため、家よりも道の方が高

くなってしまった。その道を通って畑に行っていた。脇方の海岸には大砲も据え置かれていた。
・杉山造船の杉山さんは、おかみさんの親戚が牛乳屋だった伝手で高梨の牛乳を扱ったあと、ＦＲＰを２，３艘作ってみたがやめた。その後、防水工事業をはじめた。
・浦賀とは違い鴨居には蔵がある家が数軒しかなかった。
・浦賀にも引揚船の氷川丸が来ていた。
・脇方は80軒くらいあった。かもめ団地ができるまでは、人口でいえば脇方が一番だった。
・かもめ団地のあたりは埋立地。それにより漁ができない人も出てきたので、補償金をもらった。
・かもめ団地の人たちは鴨居の祭りには参加しないが、見物には来ていた。
・お盆は、浜施餓鬼をした。生きている魚を能満寺のお坊さんが拝んで、海に放す。漁師というか町内の行事だった。魚の供養と海で死んだ人の供養。漁師は小さいタイなどを沖の生簀で生かしておいた。脇方は今でもやっていると思う。何の魚でもいいが、小さい魚だった。
・浦賀のお盆は７月、鴨居は８月。お墓参りの時間は決まっていない。各家の都合次第。本当は午前中に行く方が良いと聞いたことがある。
・清さんの年代は、女子は小学校６年行って、高等科に２年行って、家事を手伝いながら家でお裁縫（和裁）を２年習って、その後に洋裁を２年習って、嫁にいくのが普通だった。腰越に裁縫を教える人がいて、そこに習いに行っていたようだ。洋裁は横須賀の方に行き、習っていたようだ。横須賀に靴下工場ができてから女性の働き先ができた。
・清さんの母は、北方の生まれだったが、東京の方に奉公に出ていたこともあったようだ。そのため、東京の事はよく知っていた。清さんの母の世代は、脇方と北方で婚姻することが多かったようだ。浦賀の人と結婚することはほとんどなかった。もちろん、脇方同士の結婚もあった。
・清さんは昭和 23 年から漁師になり、同じように漁師になった人が多かった。戦争が終わって、みんな職がなかった。漁師の家でなくても、漁師の手伝いをした。船の数はそれから10年ほど経ってから（昭和30年代）増え、それは昭和50年ころまで続いた。そのころは、木造船だった。鴨居はほとんど一本釣りの船で、手伝いの人もその一本釣りの船に乗り仕事をした。親子で操業していた船も多かった。最盛期で 100 人くらい漁師がいて、船は 60～70 艘ほどあったと思う。
・清さんの父は木遣りをやっていて、能満寺の建前のときに木遣りの人たちと投げ餅を見物人に対して行ったらしい。
・清さんの子供の頃は、浦賀の早稲田に開業しているクワナという医者が良く来ていた。大津には医者が何軒もあり、そのなかのタバタという医者が子供の頃はよく往診に来てくれた。クワナさんは夜中でも自転車で来てくれた。お金持ちの家に往診に行く時はタクシーで、お金がない家には自転車で来るなど、気遣いができた人だった（タクシー代を患者が負担するため）。

そののち、鴨居出身のお医者さんが西叶神社の近くで開業した。
・親が浦賀ドック勤務の子どもでも、漁師になった（漁師の家の手伝いで）。終戦直後の浦賀ドックでは造船の仕事がなかった。鴨居では、勤め先と言えば、浦賀ドックか横須賀の海軍工廠だった。清さんの父も、会社勤めをしていたころも少しだがあるようだ。関東大震災後は土木・建築業が必要とされたようだ。この辺は、関東大震災のあと水が引いて陸地が増えてしまったと母から聞いた。
・父の時代の宴会は、宴会がはじまる前に木遣りを披露した。父はワカイシュで木遣りができた。昔は北方に行って習っていた。父は自分に木遣りをやらせようとはしてなかった。
・お正月のカケザカナは、鯛ではなく、あまり大きな魚ではないが２匹必要である。
・脇方の人たちは、毎年、三が日に川崎大師に行くことが多かった。もちろん、正月は鴨居の八幡神社にも行く。
・誉め言葉は宴会などで謡われるもので、鴨居では以下の誉め言葉が謡われていた。
東西な東西な　わたくしは何も誉める作法は知らねども　ちくとんばかり誉め申しましょう　正月の 28 日に武山不動ご参詣　賽銭三文打ち投げて　はるか海を眺むれば　横須賀手繰りがあみを引く　ちょいと走れば走水　ちょいと下がれば三軒家　鴨居観音鳥ヶ崎　浦賀の湊は良い湊　出船入船かかり船　かかった船のともづなを　えんやらやーたくりはーま　千駄砂山うち越えて　野比津久井の浜千鳥と敬って候

○漁のこと

《船について》
・50 年ほど前は清さんの船も木造船だったが、動力にはディーゼルエンジンを使っていた。他の船は灯油を使ったエンジンでマグネットとプラグを使い点火していた。それよりも昔はガソリンエンジンだった。木造船の頃はディーゼルエンジンを載せている船は珍しかった。清さんが数えで 22 歳の時にお伊勢参りに行った。その時に、東京駅の八重洲口にヤンマーディーゼルのエンジンが展示されていた。その時初めて、ディーゼルエンジンを見た。同じ４馬力でもディーゼルエンジンの方が大きかったので、「うちの船には大きすぎる」と思った。ガソリンエンジンでも灯油を使ったエンジンでも船外機タイプではなく、エンジンは中に積むタイプだった。三崎のほうがディーゼルエンジンの導入が早かった。小脇丸に初めて積んだディーゼルエンジンは三菱の４馬力だった。ヤンマーよりも小さいエンジンだった。最初はセルモーター付きではなく、手で回してエンジンをかけた。エンジンオイルの交換は自分で作業した。ディーゼルエンジンの最初の頃は、艪も併用していたが、スカンパという帆を使う様になって艪を積まなくなった。スカンパで舵をとれるからである。ただし、エンジンをかけっぱなしにすることになった。艪を使っていた頃は、エンジンを止めて艪を漕いでいた。魚を釣っている間は艪を誰

かが漕いでいないといけないので、スカンパが出てきて１人で行けるようになった。「竿は３年、艪は３月（みつき）」と言い、艪は子供でも覚えることができた。風がある日は１人だと大変だった。昔の船に帆は搭載していなかった。艪を使いながら釣るのは、潮の流れと一緒に糸も流れていくので、その流れについていかなくてはならないためで、そうしないと糸が立たない。スカンパよりも艪の方が細かに調整できるから良いが、人手がない場合は仕方がない。スカンパが出てきたのは、60年位前のこと。

・父は昭和10年にエンジンを導入したらしい。そのころでも、片道10時間かけて、２馬力半のガソリンエンジンで勝浦までイシナギを釣りに行っていたようだ。イシナギは肝油を取るために使ったようだ。エンジンはオオタニというメーカーのものだった。

・木造船でも、大きい船の場合は毎日陸にあげることが面倒だから、ときどき陸にあげて船底の掃除をした。陸に揚げる機械は組合のところにあって、共同で使った。台風の時は、海岸沿いの道路まで船をあげた。あるいは、防大の方の港（走水？）に避難させた。台風の時はイナサと呼ぶ南東風が起こると波が立ち要注意だった。台風が過ぎるとかえしっ風（西風）に変わる。ただし、臨海団地ができてくると、風があまり吹かなくなった。

・船底の掃除のなかで、船底焼きは貝やアオサを取るために行う。それらが付着していていると、動きが悪くなる。年２回ほど行ったが、ＦＲＰ船にはやらなかった。

・魚群探知機は木造船から使いだした。

・新造船のお披露目は、餅やミカンを撒いた。シンセンをおろすとみんなで祝う。周りの人は言わなくても知っているので、勝手に集まってくる。

・鴨居は１月の３日にフナイワイといって、どんな小さな船でもミカンをなげた。２日はハツデといって沖にでた。元日は休み。清さんが漁師になりたての頃は元日と３日が休みだったが、遊漁船や仕立船が増えるようになり、元日だけが休みとなった。

《中栄丸（なかえいまる）について》

・中栄丸は脇方の一本釣り漁師が集まって操業したアグリ網船だった。

・操業時期は、おおよそ１月から３月まで。操業場所は横須賀の軍港から久里浜港のあたりまでで、基本的な操業時間は午前３時から８時ごろまで、そのあと昼寝をして、また午後の３時から８時ころまで操業した。

・中栄丸で使っていたアグリ網は、網の目あいが一尺に対して14（網の目が14あること）だった。中栄丸はコノシロとサッパを主に狙い、それらはその目あいで良いが、シコイワシは14だと網目に刺さってしまう。沖は寒いから、網をやらない時は火にあたっていた。魚群探知機が出てきてからはそれをつかった。夕方の方が魚が魚群探知機に出てくる。夕方の方が魚が上がって来るのだろう。魚群探知機を搭載している船は網船と別にいる。魚群探知機がない頃は、１週間も10日も網をやらない日もあった。魚の群れが見えなかったら出ても無駄だから。

・網が置いてあるスペースに板を張って、石油缶で暖をとっていた。朝の３時から起きても、網をやらないときもあった。
・道具などは、一番後ろに箱があってそこに入れていた。
・網裾を閉じるための綱を巻きとるために、ウィンチもついていた。網を入れていた場所はアミマと呼んだ。
・全員で20人くらい。網船には１艘６人くらい×２。網船である中栄丸（２艘）とテブネ（魚を見つけ指示をだす船）１艘、ヒキフネ（網船を引っ張る船）１艘で漁にでた。中栄丸２艘を引き合わせて１艘にし、ヒキフネに引っ張ってもらって漁場に行った。網を使うときだけ艪を使った。中栄丸は３丁か４丁の艪で漕いでいた。網船には捕った魚をあまり積まなかった。ヒキフネに魚を積んで、それでも積みきれない時に網船に積んだ。ヒキフネが港まで何往復もした。その間、網船は魚を網に囲ったまま待機している。ヒキフネに水槽があるわけでなく、ただ入れていただけだった。
・魚が捕れた時に立てる旗（杉山造船が作ってくれた中栄丸の旗）は、網船の一番後ろのところに立てた。博物館所蔵の中栄丸にはその設えは外されている。鳥居みたいな形をしていた。
・網は木綿で出来ていた。清さんが漁師を始めるようになってほどなくして、クレモナ製の網になった。木綿は乾かしておかないと腐ってしまうから、時々干していた。クレモナも穴が開いたら、アバリで塞いだ。アバリは煤竹が良いとされた。網は、八幡社の下の浜で干した。
・木綿製の網は、カシャギ（=柏木）の渋で染めて耐食性を持たせた。１年に１回、染めていた。水もはじくようになり、乾きやすい。
・中栄丸は持ち株制で、持ち分に応じて、魚の売り上げが配当された。修繕積立金を引いて配当していた。
・配当は、手間賃部分のホネシロと純粋な配当部分にわかれていた。ホネシロはその日の漁に出ていない人には支給されない（骨代、骨を折って働いた分の賃金のこと）。休んでいても株主としての配当はある。
・清さんが始めたころは魚群探知機がなかったから、目で魚群を探した。半月も網をやらなかった日もあった。魚群探知機が出はじめたときは、魚影が何かわからずに網をして、小さい魚で網からこぼれて、無駄になったこともあった。経験を積んでくると、魚影を場所とあわせて判断できるようになる。魚群探知機は、魚を見つける船に搭載した。魚を見つける船は、テブネと呼んだ。昼は手拭いで網船に合図、夜は懐中電灯で合図した。手で円を描けば網をやれ、など。引っ張る船は、ヒキフネと呼んでいた。ヒキフネには２人は乗っていた。網船には、ヘノリ（船首にいる乗組員）と、トモ（船尾にいる乗組員）がいて、他の乗組員とあわせて１艘に６人ほど。昔、網を買ってはじめた頃は、漁が良かったので株券はたちまち売れた。捕れるときは、朝捕ってまた夕方行っていた。清さんが子供の頃は、漁がいっぱいあった。網船で、網をやる人は決まっていた。網を肩にかけて網を海へと投げる役目が大変だった。トモで艪を

漕ぐ人も、艪で舵もとらなければならないから大変だった。金具が外れて網が広がる。金づちで叩いて、カターンと音がしてスーッと船同士が離れていく。その広がりをコントロールする人がトモで艪を漕ぐ人だった。

・松の木で出来たオキザに穴が開いていて、エボみたいに木でできたものがつっぽして（突き出て）いて、艪の方にはイデッコという半円のものが付いていた。清さんは、最初はワキロというトモロのひとつ前にある艪をこいでいた。終わりころには、トモで艪をこいだ。

・ウィンチを巻いちゃえば網が閉まって魚が逃げない。網を広げてからウィンチを巻くまで約10分くらい。中栄丸が廃業する直前期は、清さんより年長者が3、4人いた。その3、4人も網船のほうに乗っていた。テブネに乗る人は決まっていた。

・テブネは、網船とテブネとの距離、網船と魚群との位置関係、両者の速さを見測れる人が乗った。網船では金具を叩いて広げる人もタイミングが重要。網を開けると板子を叩いて音を出して魚を驚かせた。網船が沖へ廻って岸に向けて網をやっていた。魚は沖へ逃げたいから、岸に向けて網を開いたのではないか。

・魚探は真下しかわからないが、ソナーは横も分かる。昔の魚探は性能が悪かった。網をやっても失敗することは何度もあった。

・下浦の金田の網船が魚探の導入が早かった。1月28日の武山の初不動の日、下浦の網船が旗を立てていたので、初不動だから立てているのだと思ったら、魚を捕っていた。魚群が見えないのに魚を捕っていたので、そのときはじめて、魚探を使っているのが分かった。それを見て魚探をつけようという話になった。金田には定置網やコノシロを捕る網船もあった。

・テブネもヒキフネも木造船だが、エンジンで走った。最初の魚探は、着脱可能なもので船の横につけていた。

・初代の中栄丸は、千葉の富浦から譲り受けたもので、清さんが子どものころ、戦前戦中期の話。網は安浦から買った。その時代は魚に公定価格があった頃だった。

・2代目中栄丸（写真3参照）は杉山造船で作った。清さんが漁師になった頃はまだ初代の中栄丸だった。初代の中栄丸にも、網船のほかにヒキフネ、テブネがあった。

・大きさがコノシロとコハダの間の魚が一杯取れた。中栄丸に乗っていた者が一番金持ちだった。新円（最初の1000円札）を分け合っていた。（戦直後の話）

・コノシロ・コハダは冬の魚で、夕方や夜の網にかかるコノシロ・コハダは真っ白に光っていた。

・網船にはエンジンが付いていないのは、初代中栄丸も2代目中栄丸も同じだった。理由はわからない。

・中栄丸は夏の間は使わなかった。理由は中栄丸の網が、シコイワシが網目に刺さってしまうからやらなかった。

・清さんの代になると（2代目の中栄丸）、魚も少なくなり、操業日数も減っていった。それで

も１回でもうまくいくと、１カ月は生活できた。
・中栄丸にお札はつけていなかったし、船霊さまもなかった。
・後ろがトモナンバン、前がオモテナンバンと呼び、２艘をつけている状態をモヤッテイルと呼び、船同士が接する部分をマクラと呼んだ。

《小脇丸について》
・清さんの船は第８小脇丸（写真１参照）、父の船も小脇丸という名前だったが数字が違った。
・小脇丸は仕立船であるが、お客さんが来ないときは自分だけで一本釣り漁をする。木造船で仕立てをやっていたころは、数人しか乗せられず、お客さんはサラリーマンではなく、お金持ちの社長が楽しみで魚釣りをしたり料理店経営者が仕入れと趣味をかねて来ていたりした。
・自分だけで漁に出るのとお客さんを乗せるのは、最初のうちは半々くらいだった。その頃は、父のほうが断然上だった。10年位やるようになって自信がついてきた。だんだんと釣りのお客さんを乗せる頻度が多くなっていった。タイはキロ１万から１万５千円ほどだった。組合に売って、組合のイケスで育てて、酸素を入れる水槽付きトラックで築地の市場まで持っていって、高く売れた。特に台風が来ている間は、市場が開いていないので、台風が過ぎ去った直後は高値になった。横浜の市場よりも築地が一番高値が付いた。築地には高値の魚が多く集まったともいえる。昭和の頃は、料亭などでの接待が盛んな時期だったのもある。
・清さんの父は、千葉県の勝浦や大原までイシナギを釣りに行っていた。大きいもので１匹20貫あった。向こうの魚はなんでも大きかったが味はまずかったようだ。
・戦前戦中、父の代の時は、偉い人が仕立てのお客さんだった。警視総監や満鉄の副総裁、銀行の頭取など。泊りがけで来る人がいた（高橋家に泊まっていた）。父の代の時の船は、３人乗ったらいっぱいになった。当時はリールではなく、手繰りで糸をあげる。
・横浜から週に２回来る常連さんもいた。うちの常連さんは、船頭の言う通りの場所に文句を言わずに行った。釣り場を指図するような人はいなかった（他の船が集まっている所は良く釣れるところなんだからそこへ行け、と言うような）。清さんは、他の船がいないところを狙っていた。他の船がいっぱいいるところは、競争過多になっているから。いい場所に行けば、こっちが何もしなくても釣れる。
・清さんは浅い所では竿を使ったこともあるが、清さんは基本手釣り。お客さんは竿を使っていた（おもしろいから）。
・父の代の糸は、テグス（中国産の）をつなぎ合わせて長くしていた。テグスはつなぎ合わせるから、瘤がいっぱいある。瘤をほどいて、とんがった所を切るなどメンテナンスも行った。そうすると、だんだん短くなる。
・ナイロンの釣り糸が出始めたころは、10ｃｍのものを水に漬けて１ｍの長さになるものだった。テグスというのは、中国から取り寄せるもので、高級品だった。父は漁師になりたてだっ

た自分にはもったいなかったので使わせなかった。自分がなりたての頃は、人造テグスと初期のナイロンでハリスを組み合わせた。そののち、50mのナイロンができた。具体的には、ハリスに使う銀鱗、道糸に使う空色の糸が出てきた。最初のナイロンは、自分が漁師になりたての昭和23年、24年のころ、製造会社の人だと思うが浜に営業に来ていた。人造テグスにはもともと色がなかったが、人造テグスは滑り止めのためお茶に漬けていた。ナイロンは切れにくく丈夫だった。天然テグスは繋ぐ手間、傷ついたところを取り除く手間などがあり、高価でもあった。お金持ちのお客さんがついていたため、父は使えたのかもしれない。人造テグスは長いものが売っていた。天然テグスをわざわざ父は使っていたので、人造テグスよりも性能が良かったのだろう。

・昔、スミイカを釣るときは、麻糸に渋をつけて使った。冬、渋をつけるシブハリは時化のときの作業だった。渋をつけないと長持ちしなかった。渋を売っている店があって、1升徳利で購入した。自家の渋柿から取ったものではない。麻糸はスミイカ釣りにだけ使った。

・タイテンヤの錘を作る道具（写真4参照）はその名のとおり、タイ釣り用のテンヤに付ける錘を作る道具で、父の代から使っていた。使い方は、まずお玉に入れた鉛を火であぶって溶かす（ロウと一緒にとかすと溶けやすい）。針金を刺しておいた穴に溶けた鉛を入れ、いっぱいになったら針金を抜く（複数のテンヤを同時に作れるこの道具は珍しい）。この道具の名前は特にない。近所の漁師がよく借りに来た。複数個を同時に作るときは、熱くなるので雑巾などを当てて持った。水深が浅いところ用のものは2番目か3番目に小さい穴を、深い所は2番目に大きいものが良かった。

・ワカメの種付けもやっていた。その作業が終わった後に、妻がタイ釣りに行きたいと言ったので連れてったら、大漁になったことがある。完全なビギナーズラックだった。それが10月30日で、ちょうどそのころ、浅い所から深い所へとタイが動く。12月頃だと100mくらいの深さまで行くようだ。

・父の代からのお客さんもおり50年の付き合いだった。ただし、父のお客さんは上手なお客さんはいなかった。きっと、父は上手だったが大人しかったので、客に助言しなかった。清さんはがみがみ言うほうだったから、お客さんも上手になった。

・父と一緒に行ったのは3年くらい。清さんが数えで20歳の時に、父が新造船を作ってくれて、別々になった。

・清さんは、数えで17歳で漁師になり、数えで20歳の時に杉山造船で新造船を父が作ってくれた。20歳で船を持つのは早いほうだった。木造船は普通10年は使えたが、8，9年後にまた新造船を作った。船もエンジンも新しくしていた。20歳の時の木造船もエンジン付きだった。父は3艘、自分は5艘（ＦＲＰも含め）船を作った。写真1の第8小脇丸はＦＲＰ船で49歳の時に作った。木造船のころも第8小脇丸。杉山造船で木造船を作ったのはうちが一番多かったと思う。新造船をおろすときは、八幡神社の神主さんにお祓いをしてもらう。新造船のお祝い

では、近所の人が集まるので、みかんやお菓子を船から投げた（振舞った）。
・20歳過ぎには、ポツポツとお客さんを乗せるようになっていた。父でなく自分を選ぶお客さんも、割と早いうちから出てきた。父が上手でお客さんが集まってきて、自分もその流れでお客さんが付いた。そのころのお客さんはみんなお金持ち、会社経営者だったり料理店を営んでいたりする人が多く、平日に一人で遊び半分で来ていた。仕立船なので貸し切りで船頭が釣った魚もお客さんにあげる。自分の船をもった頃は1日3000円から4000円くらいで仕立てていたが、65歳のときは、1日3万円で仕立てていた。昔も今も（引退のころも）お客さんは一人が多かった。のんびりと魚釣りを楽しむ人が多かった。現在の一般的な遊漁船とは違う感じだった。
・ヤマアテの場所は自分で習う。父も教えてくれたが、やっぱり自分で覚えないと駄目だった。
・鴨居に来るお客さんは、タイ釣りが目当てで、他の魚はほとんど狙わなかった。横浜横須賀道路ができるまでは、浦賀まで電車で来るお客さんが多かった。8時頃までに鴨居に着いていた。ただし、戦時中や終戦後のお金持ちのお客さんは車で来ていた。戦時中、父のところには、警視総監や銀行の頭取、満鉄の副総裁も来ていたらしい。後に戦犯になった人もいたようだ。鴨居の中でも小脇丸は仕立船の先駆けのひとつだった。
・父は波に弱いので（船酔いしやすいので）、朝に風が吹いていると、船酔いしないためにみそ汁も飲まずに出かけて行った。
・うちは仕立てだから、客が釣った魚も船頭が釣った魚も客が持って帰れる。1回20匹は釣れていた。
・木造船では釣るときは艪、走る（移動する）ときはエンジンを使った。船の後ろに着ける帆とエンジンで操舵して釣ることもできるが、その技術がないうちは艪に頼ることになる。
・父は、昭和10年頃の春から夏、ガソリンエンジンの2馬力半で10時間かけて勝浦までイシナギを釣りに出掛けた。1ｔほどの船（杉山造船で作った木造船、博物館所蔵の鴨居船と同型、写真2参照）に寝具を積んでいったようだ。この辺の漁師みんなで行ったようだ。
・終戦後、9月から11月にかけて千葉の洲崎や布良のあたりに、鴨居の釣り漁師が大勢で、タイ釣りに行った。水がきれいだから、昼間はあまり釣れず、夜に釣れた。メバルやイサキも釣れた。そのころも1ｔほどの船で出かけ、昼間は寝ていた。そのあたりは、定置網や大某網の漁師や棒受網でアジを捕る漁師しかおらず、漁師っていう漁師（コショウバイ、釣り漁師）はいなかった。父も清さんも波に弱いから1週間ほどで帰ってきた。薪を積んで行き、石油缶を切ってヒドコにして、お釜を乗せご飯を炊いた。釣った魚をおかずにした。寝具も持って行き、昼間は港に停泊して、船にテントを張って寝る。宿はとっているが、親方が泊まってワカイシュは船で寝た。銭湯に行く人が多かったが、清さんは銭湯には行かなかった。帰りは、千葉のおいしい米を買って帰った。

《万祝、大漁祈願について》

・万祝を着ている人がいたのは、昭和40年頃までで、お正月に着ていた。ハチゴロウの印である丸に八が背中の所にあった。戦前までは鴨居でも万祝が配られていた。東のアグリ網（東丸）が網子に配ったもので、釣り漁師には関係ないものだった。東は正月に大田区の穴森稲荷にお参りに行っていた。

・漁がなくて、臨時でお神楽をやってもらったことがある。汐祭と呼んで、港の竜宮様でお神楽をしてもらい、船を出してお囃子もでるが、神輿はでない。後にも先にも汐祭をやったのは清さんが若い頃のその1回だけだった。

《その他について》

・魚は海によって味が違う。相模湾のタイよりも東京湾のタイの方が美味しいという自負がある。

・土用のうちのタイは水3合あればいい（＝夏のタイは浅いところにいる）と父が言っていた。だから父は夏は浅いところ（水深10mくらい）ばかりやっていた。

・観音崎は潮が早いから、お客さんには向かない。

・定置網の近くは良く釣れる。まるで井戸に垂らしているように、糸が動かない。観音崎のように普段潮の流れが速いところは、潮の流れが遅くなるとタイは喰わなくなる。普段から流れが遅いところはいつでも喰う。だれでも、糸が立つのが見えると良く釣れる。潮がタルイところはいつでも釣れる。いつもそういうところでお客さんを釣らしている。だから横浜でも鴨居の髙橋は有名だったようだ。

・三浦海岸の沖に「かかり根」という大きくて良い根がある。父はその根の縁（へり）などを詳細に知っていた。鴨居ではかかり根に行くのは小脇丸くらいのものだった。秋になると毎日のようにワラサが跳ねていた。タイもいるだろうと思ったが全然かからず不思議に思っていたら、タイが跳ねるのを見た。タイが跳ねるところを見たことなかったのでそれを父に言うと、糸を垂らしたまま艪を漕いで船を動かした。それによって、糸が浮き上がって来て、タイが釣れた。タイもワラサと同じく浅いところにいたようだ。ワラサも跳ねていたし、浅いところに鰯がいたのだろう。ただ、ワラサは釣れなかった。父と一緒に行ったときもいろんな思い出がある。二人で糸を垂らしていたら、糸に触る感触があったが何も釣れなかった。しばらくして、タイが釣れ始めた。タイが多くいたが最初は食い気がなかったのだろう。

・昔は季節ごとに魚が違ったが、今は季節感がなくなった。タコは、寒くなると水深70mほどのところでいっぱい釣れたが、今は真冬でも浅い所にいるらしい。小脇丸でもタコカゴ漁をしたことがある。タコカゴにコノシロやサバを入れて、早朝に仕掛ける。タコカゴは15個で1組、それを3組用いて漁をした。目方で2ｋｇのタコが多かった。

・今は夏でも冬でもアジが釣れる。冬のアジでも油がのっているが、コマセ（イワシをひいた

の）を使った漁が盛んになったことが原因かもしれない。
・この辺でも11月か12月に大きいブリが釣れたこともあった。朝にヤリイカを釣って、それを生餌としてブリを釣っていた。タイもヤリイカを使ったが、タイはヤリイカをかぶりつく感じで、ブリはヤリイカを飲み込む感じだった。2月3月もヤリイカは釣れた。
・カジキは見た事ないが、マンボウは見たことがある。カツオ・マグロは見たことがない。小さい1年物のシイラも入ってきたことがあった。東京湾の水は濁っている方が良い。きれいな水を好む魚は東京湾まで入ってこない。
・冬のスミイカは毎日平均的に釣れていたので、安定した収入だった。一斗缶に2、3杯釣れた。スミイカは12月から3月にかけて、深さ80mあたりにいる。テンヤ（針が2本出ていてそこに餌をくくるつける釣り道具）にシャコをつけて釣った。針の部分は、ピアノ線やワイヤーを譲り受けて作った。
・剣崎の先に、ノッコミという浅瀬があってタイが良く釣れた。
・「タイの子はイワシの子よか3匹多い」と昔の人は言っていて、タイが沢山いたことを言い表した。
・チダイ（別名ハナダイ）で1ｋｇ以上のものはあまりいない。
・クロダイはここら辺ではあまり釣れない。あまり食べたことがない。
・マダイの放流をしはじめると、だいぶ増えた。チダイは放流していない。
・春先のマダイはあまりおいしくないが、チダイはおいしい。
・ムギイカは、畑の麦が黄色になる5月頃に、スルメイカの小さいのが釣れるため、それをムギイカと呼んだ。
・かもめ団地がある場所は、埋立前はヒラトコと呼ばれていた。岩礁地帯だったが平らな場所だった。かもめ団地の造成による埋立には漁師のなかでも、沖に出る漁師はそこまで反対しなかったが、そこを見突漁の漁場とする大室の漁師は反対した。今では大室の方が遊漁船が盛んである。見突きでは、サザエ・アワビ・ワカメ・テングサ（ブト）を捕っていたようだ。戦前は、大室の沖は浦賀ドックのゴミ捨て場で、船で捨てていた。鉄くずが高く売れるようになると、潜って鉄くずを回収していた。大室はかもめ団地ができてから、見突漁をやめて遊漁船へと変えた。やはり埋立で水質が悪化したのだろう。初期の大室の遊漁船は、杉山造船で作った木造船だった。
・昔、松輪は漁師百姓（=百姓比率が多め）だった。もともと三崎のサバ釣りの船に乗っていた人が多かったが、畑を売って新たに船を作った漁師もいたようだ。漁師百姓は、浅瀬でのタコつぼ漁が多かった。
・松輪の漁師の人数が多いのは、あそこから勤めに行くのには不便な場所だからというのもあるようだ。
・鴨居では海苔はほとんど作らなかった。ただし、ワカメのイカダに天然の海苔が付いていた。

それを食べるとおいしかったようだ。昔、大室で川崎かどこかから来た人が海苔をやったことがあった。

・鴨居では清さん世代の漁師が多かったが、その世代は息子に跡を継がせず、勤め人にしたため、今は漁師の数が少ない。

・昔はタイが１ｋｇあたり１万円から１万５千円した時期もあって、数は釣れなくともそれで生活できた。

・ヤマアテの山は動かないけども、山の様子や家が建った壊したで見た目が変わってしまう。ヤマアテの正確な場所を忘れてしまったとしても、とりあえず糸を垂らせば魚が教えてくれる。漁師によってヤマアテの精度が違う。清さんはきっちりしてないと嫌だが、だいたいの場所が分かればいいという漁師もいる。

・ヒガシ網（鴨居の東地区）の網は本業のアグリ網だった。脇方の中栄丸は釣り漁師の冬の兼業。冬はスミイカ釣りがメインだった。魚が出てきて取れそうなときに網を張った。海水温が高くなったせいかスミイカはもういなくなった。

・久里浜は冬はムツ釣り、春はイサギ、昔はその地域地域で釣るものが決まっていた。

・久比里はボウチョウと呼ばれていた見突の漁師しかいなかった。ある時、遊漁船を始める人がいて久比里の人がみんな遊漁船に変わっていった。見突漁では、アワビやサザエ、ワカメ、テングサなどを捕っていた。現在の遊漁船の人たちの親の世代が見突漁師だった。

・この辺では、鴨居だけがタイ釣りをしていた。それが鴨居のショウバイで、スミイカも他所はやらなかった。

・昔、金沢八景のあたりは、小さい船で第三海堡のあたりにタイやスズキ釣りに出てきていた。

・台風の後は、浅い所のタイが良く釣れる。昔は台風襲来の前後も操業した。台風の後は、他で漁がないから、魚の値が良かった。

・鴨居は、タイを生かして築地に運んでいた（トラックで、酸素入りの水槽で）。東京に近いということで出来た技だった。東京の料亭が繁盛していたころは、タイが非常に高値で売れた。タイがないと宴会はじまらないという時代だった。

・手繰りのコツは、親指と人差し指で力の加減をすること。魚が強く持って行くときは、糸がスルスルと行くように力を弱め、反対に引かなくなったら、こっちが引く。それを繰り返し、だましだまし引き寄せる。

・大きいタイは、かかりっぱなは強く引いてくる。それにつられてこちらも強く引いては駄目。

・昔は竿と言っても、竿の先にチチという輪っかをつけて糸を縛るようにし、長さを決め竿を固定して、糸が曲がって来ると艪でこいで船を先に出して真っすぐに調整した。リールがない頃はそれで調整した。釣りのお客さんはリールが多かった。ただ、昔は小脇丸で道具を貸したから、慣れない手釣りで糸が絡まる人が多かった。リール使用でもルアーを使うお客さんはほとんどおらず、餌釣りだった。ルアーは常に動かしていないと駄目だという難点がある。

・久里浜沖のアシカ島より奥（鴨居側）はコマセ釣り禁止だった。寒くなると魚が奥から南へと深い場所目指して移動する。鴨居沖で80mくらいだが、久里浜はもっと深い。
・清さんより前の世代の漁師は、鴨居でもタチウオ釣りをしていた。清さんの世代はもうやらなかった。
・鴨居にモグリ漁はなかったが、アワビやサザエを、器械潜水によって富津の漁師に捕ってもらったことも一時期あった。
・最近までは、鴨居は小さな船でぼちぼちやっていれば、家族を養うくらいはできたが、他所はそうはいかないので、次々と漁を変化させながら対応していたのではないか。
・昔はアジが1月から3月は釣れなかったが、今は年中釣れるようになった。
・東京湾でマンボウはほとんど見たことがない。1 年物のシイラはこの辺に来ていた。カンパチの1年ものも9月10月に来ていた（釣れていた）。イナダもワラサも秋に釣れた。
・10 月はヤリイカを釣って、生きたヤリイカを使ってワラサとブリの中間の大きさ（セグロ）を釣った。タイも餌がないときは、ヤリイカの生き付けで釣ったこともある。ヤリイカでヒラメも釣った。20ｃｍくらいのヤリイカを使った。ワラサはヤリイカを短冊のように切って餌にした。それだけヤリイカも釣れた。スルメイカ（ムギイカ）もまあまあ釣れた。ヤリイカ・スルメイカよりも、スミイカのほうが値が良い。ここら辺では、ショウバイになるほどヤリイカが釣れなかった。餌に使うくらいしか釣れなかった。ムギイカも餌になり、タイ釣りもしたことある。生きたイカを使うと、食べられる前にイカが逃げるためか、よく引いた。魚が食ってるかと思ったらイカが動いている（引いている）だけだった。短冊にすればイナダやワラサのエサにはなった。大きいヤリイカやムギイカが捕れても、売れるほどの量ではないため自家消費用にした。
・魚釣りは面白い。ショウバイでもおもしろいんだから。
・漁師になりたての頃、イナダが5月から6月ごろの入梅時期にいっぱい釣れた。
・定置網は夏場がよく捕れた。
・タイ釣りでも魚探を導入して、魚探をかけて回りながら根を探すこともした。
・タイが減ったころがあった。タイの放流を始めると、タイも増えてきた。そうすると、大きい釣り船がコマセを撒いて釣るようになるとまたタイが減った。クロダイは寒い時期がおいしいと言われるが、あまり捕らなかった。スズキとアイナメ、アジは夏がおいしい。ほとんどの魚は冬がおいしい。スズキは夏釣れるが、アイナメは夏あまり釣れなかった。
・タチウオは秋に多く釣れるらしく、千葉の金谷の釣り船がよく来ていた。
・手釣りのときは、かかったら糸が切れるかどうかの瀬戸際まで引く。そうしないと針がかからない。
・タイと言えば鴨居、冬はスミイカだった。久里浜は夏はイサギ、冬はムツ。松輪は夏はイサギ、秋はサバ、冬はキビナゴ。というようにその地域の代表的なものがあった。

・タイは生かしたまま卸さないと、値段が３分の１ほどになる。釣るだけでなく、生かしておくのも大事。生かしておくためには空気抜きをする必要がある。
・松輪には男の海士がいた。松輪の海士は、船の上で暖をとっていた。
・自分はやらないが、見突漁は当然、目が良くなければ駄目だった。釣りでも網でも漁師は目が良く、場所を覚えていないと駄目だった。潮の流れを見極めて、船や仕掛けがその流れに乗ってどう動くかを予測しなければならない。
・網漁をすると、その網で捕れた魚以外の魚、逃がした魚はその場から離れてしまうから、網漁師のことを一本釣り漁師はきらっている。釣漁は釣り損ねた魚以外の魚には影響がない。
・コマセは柔らかい棹で手元から曲がるから、タイがかかっているかどうかわからない。普通の棹は先が動いて、タイとの駆け引きが楽しめる。
・スズキは群れで動いている。浅いところにおり、15尋くらいの糸で釣れる。父と一緒の船に乗っていた時は12月５，６日頃に良く釣れた。
・戦争中は海中に聴音機があって、夜は音を出してはいけなかったようだ。終戦間際は、機雷があるような禁漁区に漁船が入ってもうるさく言われなかった。
・下浦の金田が、この辺では一番初めに魚探を使い出した。魚が見えないのに網をやっていたので、わかった。金田にも中栄丸のような網船があった。金田は本業の網船もあり、定置網もあった。定置網はシコイワシをとって、カツオの餌として売っていた。高知のカツオ船が良く買っていたようだ。
・大室の豊丸（ゆたかまる）はアグリ網をしており、乗組員12，13人（指示出す船も入れて）がいた。カツオ船に対してイワシを売っていた。そのイワシは８畳間ほどの大きさの八角イケスに１週間ほど置いてから売る。深さは３ｍほどあり、死んだイワシは海底に落ちるようになっている。豊丸は鴨居のアグリ網の船のなかでは一番後にできた船で、杉山造船で作られた。
・竹で編んだイケスは見たことない。
・魚が良く取れていたころは「東京湾は俺んとこの銀行だ」というふうにみんな言っていた。父も「海山尽きない」と言っていた。
・タイが減りだしたときに、タイの養殖・放流をして再び増えだした。しかし、乗り合いの遊漁船がコマセを撒いてタイを釣りだし、また減りだした。コマセだとよく釣れるため釣りすぎてしまう。
・エビでタイを釣るのは、この辺では鴨居だけだった。エビは自分で捕らずに、千葉から仕入れた。千葉では夜に捕るので、朝、生きたものを仕入れた。冬はエビを売ってないので、冷凍のものを使った。今では千葉でもエビを捕ってないだろうから、それもあってコマセになった。コマセで釣るのは、竿を引いたり戻したりしながらのタイとの駆け引きがないため、つまらない。
・糸は素手で手繰ったが、指サックを使うこともあった。タイがかかったときは、３回引きが

ある。それをタイの三段引きと言った。釣り終わったら、魚を外して、空気抜いて船のイケスに入れた。

・場所によって、上げ潮は喰うけど引き潮は喰わないということはある。

・戦時中は、天皇陛下に献上するタイは鴨居のものだった。恩賜たばこを見たことがある。

・組合のイケスは、市場のなか、屋内にあった。それができるまでは、沖にイケスがあった。築地へのトラックは夜に出発して、朝までに築地に着くようにしていた。築地では、良質なタイからセリが始まるので、鴨居のタイはセリが早かった。

・鴨居は一年中タコ漁がある。タコ専門の漁師がいる。

・タイの一本釣り船を特に鴨居船（かもいぶね）と言った。昔は所々の格好があって、三崎船もあった。

・鴨居ではヒジキ漁は大室の人たちがやっていた。

・風が強いのは冬で、北風が強い。11 月頃は西の風、12 月はあまり風が吹かない（いい凪が多かった）。西の風が収まって来ると冬になる感じ。昔は 11 月の西の風は突風だった。今は突風というよりもだんだん強くなるように感じる。11 月 23 日の頃が西の風の突風が多く吹いていた。春の突風は 5 月頃の北風。突風は目に見えた。風とともに波が立ってくる。鴨居の辺りでは西の風は、船の横腹に打ち付ける。30 歳の頃、5 月 26 日に剣崎で鴨居の船がタイ釣りに行って、突風（北風）が吹いて松輪や三崎の港に避難した。みんなの様子を見に行くムカエブネという大きな船がでたことがあった。清さんは突風が吹く前に逃げた。視界もなくなるので危険だった。雲の流れで突風がくるのがわかった（雲の動きが早かったり、出来たり消えたりが激しい）。その出来事で漁師をやめた人もいた。北風の突風をシグレと呼ぶ。西風は午前中、北風は夕方が多かった。5 月は夕方にタイが良く釣れるから午後、松輪の方まで行く船が多かった。木造船の頃（約 60 年前）はよく突風が吹いた。それ以降は突風が吹くことがどんどん減っていった。北風は大きな波は立ちにくかったが、西や南風は大きな波が立ちやすかった。漁師にとって突風が一番怖かった。

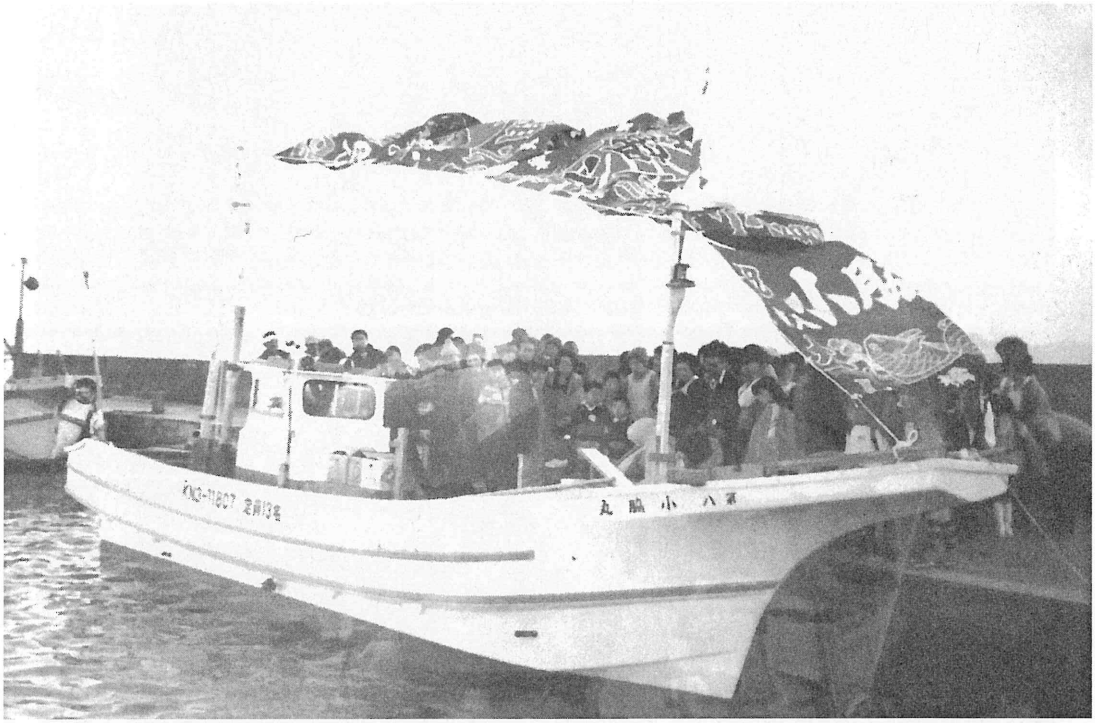

写真１　小脇丸

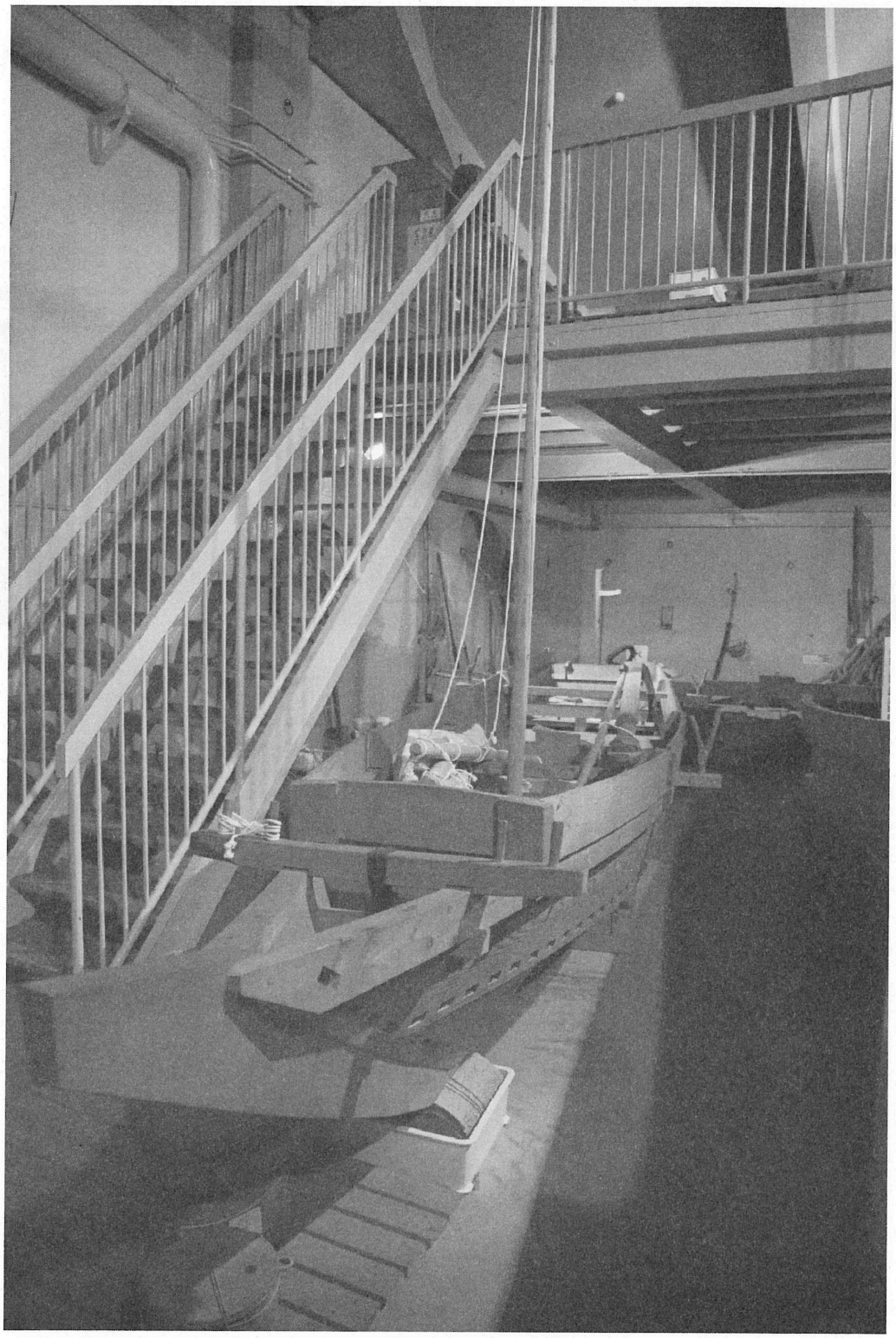

写真２　博物館所蔵の鴨居船

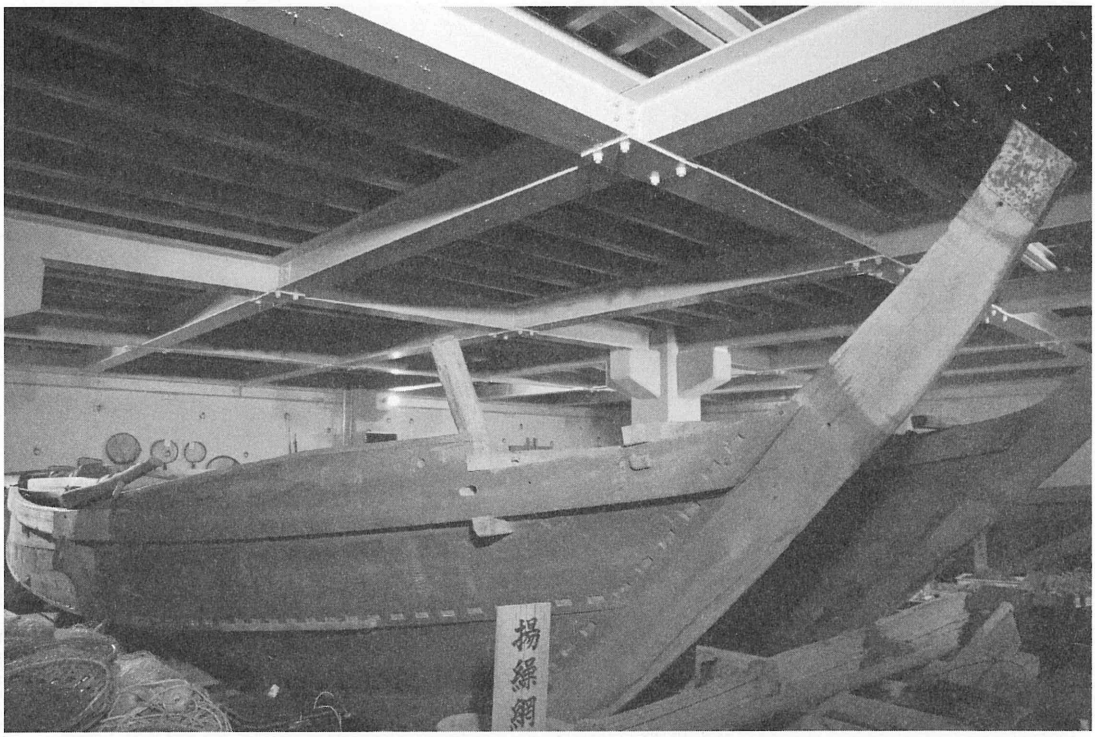

写真３　博物館所蔵の中栄丸（2 代目、昭和 35 年頃まで使用）

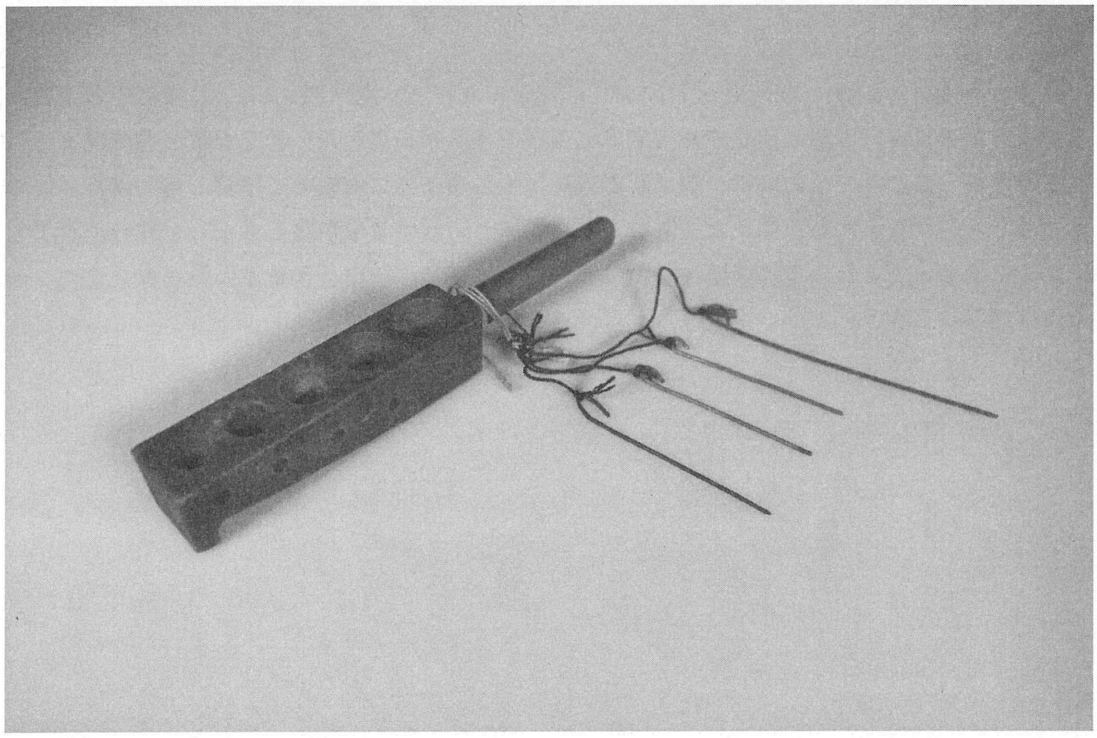

写真４-１　タイテンヤの錘をつくる道具

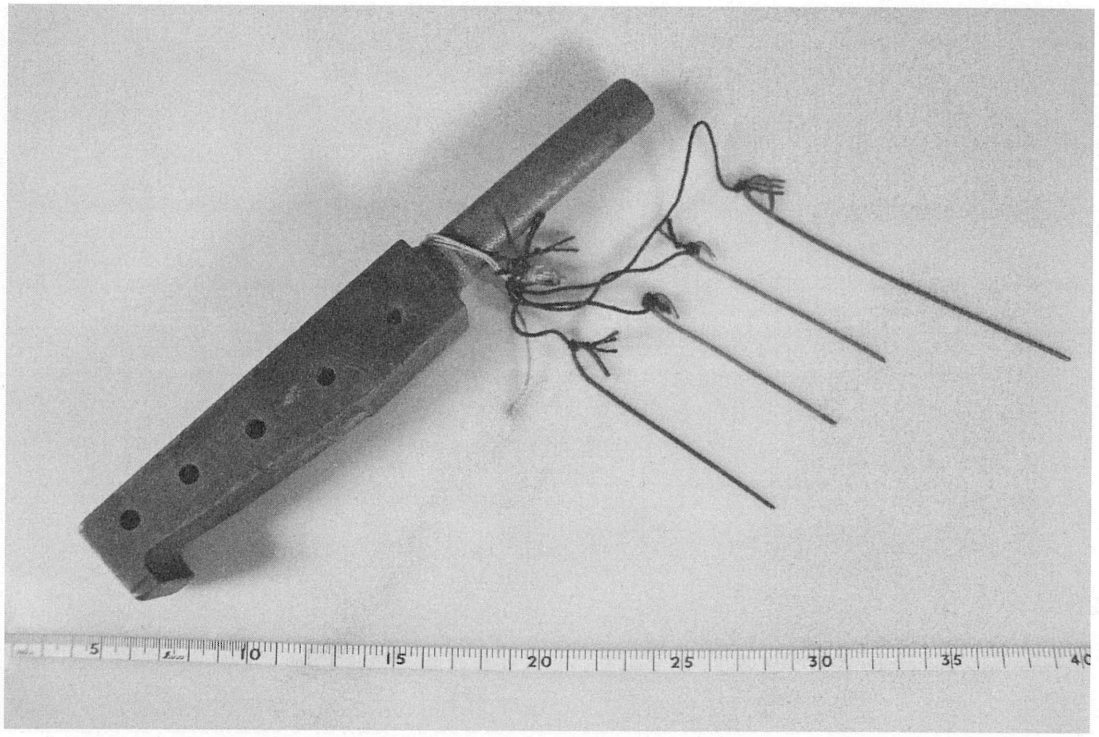

写真４-２　タイテンヤの錘をつくる道具

付記

話者の髙橋清さんは、2025 年２月にお亡くなりになりました。清さんには、2023 年７月からおよそ１カ月半に１回の頻度でご自宅にてお話をうかがいました。亡くなる２週間前までお話をうかがうことができたのは、清さんご自身はもちろん、ご家族のご理解ご協力があってのことでした。コロナ禍など様々な事情により高齢者と相対するのが難しくなった昨今、話者と定期的にお会いするという地域博物館の学芸員として王道の仕事をさせていただきましたこと、心より感謝申し上げます。